



医学部

講師 永田まなみさん（基礎看護学）

Nagata Manami

## ●プロフィール

- 1980年 熊本大学医療技術短期大学部卒業後、熊本大学附属病院看護師として働きながら、放送大学、熊本大学法学部大学院修士課程で学ぶ。
- 1997年 医療技術短期大学部助手
- 2002年 同大学部講師（2004年からは医学部保健学科）  
熊本大学大学院社会文化科学研究科公共社会政策学入学  
博士課程修了（研究領域：看護哲学、看護倫理）

## 「ケア」の分析によって看護の意味を問う

熊本大学附属病院で17年間を看護師として働きながら、放送大学、熊本大学法学部大学院修士課程と学び続けてきた永田さん。修士課程2年の時に医療技術短期大学助手に採用され、その後、2002年に同大学大学院社会文化科学研究科に進学。博士論文と取り組む日々の中で、徐々に体調を崩し、博士課程を6年がかりで修了したのは、2008年春のこと。博士論文「看護におけるケア—看護哲学序論—」のコアの部分が2008年10月学会誌に掲載されることが決まりました。「ホッとしました。本当に嬉しいです」。発展途上にある看護学で、看護の理論・臨床・倫理を架橋するキーワードは「ケア」です。ケアは誰もが（例えば母親）行っていることで、それが何かということを変更されるとナースでさえも言葉にすることが難しい。永田さんは、ご自身の長い臨床経験をふまえて、この論文で、看護領域で用いるケアという言葉の概念分析を行い、望ましい看護の中核の意味を問いました。

お母様、そして職場の先輩の支えによって、博士論文をまとめることができました。

## 勇気とは恐れを乗り越えること

「早く学位を取らねば」という焦りから先を急ぐあまり、書物や文献の中から答えを見つけ、結論を導き出そうとしました。「論文は自分で考えなければならない」という根本的なことに気づかないまま、「頑張らなくて」という気持ちと「自分に出来るのだろうか」という不安から身体が徐々に疲弊していきました。そして、うつに。何もしたくない、何もできない日々を送ります。それでも、ウォーキングだけは必死に続けました。始めた頃は何も目に映らなかつたのですが、次第に、自然の変化を感じられるようになりました。レンギョウの黄色い花が咲き乱れるなかを歩き、初夏を感じ、ぽっかり浮かぶ白い雲を眺めながら歩きました。「全てが初めてのことのように感じられました。ずっと忙しく、季節の移ろいなど気にも留めず、わき目もふらずに突っ走ってきていたんですよ」。そんな中で自分を振り返るうちに、どうやって自分が体調を崩したのかが少しずつ見えてきたのだそうです。

また、療養中に映画を見に行った時のことですが「勇気がある、というのは、恐れがないということではなくて、恐れを乗り越える（乗り越えようとする）ことなんだよ」という映画の言葉に、永田さんは涙が止まらず、映画終了後も立ち上がれなかったそうです。

## 知るを楽しむ、プチウツを乗り越えよう

このような経緯を経て「何で私は看護の研究をしたかったの？」という研究者としての基本にかえり、再びその答えを自分の中に見つけることができたのです。それは、自分自身が経験した「看護師という職業の価値と、今、進行形で働く看護師たちの思いや考えを私が代弁していかなくて」という使命にも似た思いでした。「レポートが書けない（やりたいのにできない）」といったプチウツ状態にもなる学生たち。その気持ちが、今ではとてもよくわかるようになりました。「学生を教育することを大切にしてください」という先輩教師からの言葉を受け止め、「共に学び、共に研究していただけるような次世代の研究者に出会えたら本望です」。研究の基本は“知るを楽しむ”そして“知らないということを知る”ことなのだ、今、実感している毎日です。



修士課程から12年間お世話になった師匠と。

看護研究は人間のための実践の学問。